
BABYRON 2

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B A B Y R O N 2

【Nコード】

N 6 8 7 9 M

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

携帯ゲームに端を発した『事件』に貢と啓は引き込まれていく。謎のアクセス者 B A B Y R O N をめぐって・・・
近未来SFファンタジー『B A B Y R O N 2』第2話です。

2・狙撃（前書き）

訂正があり、再度サイトUP（¥）お気軽にどうぞ。
れで間違いないだろう・・・（滝汗）
たぶんこ

2・狙撃

その電話はまた鳴った。

るるる

官房長官邸での出来事、一人のSPが受話器を上げた。

逆探知装置も準備できている。しかし、その『居場所』は突き止められない。

ガチャ・・・

また電話の呼び出し音が切れる。

「しつこい奴だな。どうせ選挙を控えてのいやがらせだろう。」
官房長官は呟いた。

「本当、しつこいな、こいつ。」

貢は深夜3時になっても携帯ゲームを続けている。

『貢は『BABYRON』の動きを監視していてくれ・・・俺はちよつと出かけてくる。ちゃんと、飯食うんだぞ。今日は帰れないかもしれない・・・何か『動き』があつたらすぐに俺の携帯に連絡入れてくれ。』

浅井 啓刑事がそう言つて部屋を去つてから、彼の言つ通り『お宝』を守っている。

アクセスは15万を超えた。

その中で一番「しつこい」のが『H・N：BABYRON』。プロフィールは『味方』になっているが、何度削除してもアクセスしてくる。

「こいつ、何者なんだ。」

貢は目を細めた。「俺を待っていたなんて。」
ふと。

貢は試しに彼の存在を確かめてみようと、

『君は誰？』

ぶちぶちとボタンを押し、メールを送ってみた。
返事はすぐに来た。

『君の味方。』

「・・・・・・」

試しに貢は『味方』に登録してみた。

ぶちっ

る・・・・・・

官房長官低のあれ程鳴っていた電話の音が途切れた。

「やっと、止まったか。」

官房長官は肩を撫で下ろした。「明日は・・・もう今日じゃないか・・・9時から国会があるんだよ。」

官房長官は白いカーテンの敷かれた窓を背にし、タバコをくわえた。

「9月には衆議院選挙もある。」

目の前の浅井 啓刑事に60代の長官は言った。「早く犯人を捕まえてもらわなきゃ困るじゃないか。」

と、怒りながら背広を抜いた。

その時。

「みんな伏せて！」

浅井 啓刑事は長官を体当たりして、床に伏せさせた。
同時に。

パンッ！

窓ガラスが粉々に割れた。

「何事だっ！」

浅井 啓刑事の下で長官が叫んだ。

「狙撃です。」

啓は冷たい口調で言った。

「何だ、どういう事だ。」

「長官が背広を脱がれた時」

啓は身を起こし、「赤い光が見えたんです。おそらく赤外線を使って標準を長官に合わせていたんでしょう。28口径のライフルか何かでしょう。」

一斉に室内のSPが動く。

その『赤い光』は啓にしか気付かなかっただろう。SWAP（警視庁特殊行動部隊）を彼は経験し、湾岸戦争の時にはあらゆる武器を実体験していたから。

『負けちゃった。』

『H.N: BABYRON』から貢へメッセージが入る。

『お宝』は、BABYRON とやりとりをしているうちに、潜り込んだ携帯アクセスから『盗まれて』しまったらしい。

『何から『お宝』を守っていたと思う？拓也。』

BABYRON からのメッセージ・・・

「！・・・」

貢は素早く携帯の電源を切った。

『拓也』という名前に反応し、荒い息と体が熱くなるのを覚えた。

『大丈夫だって。ZQTO は俺たちに何もしないよ。』

るるる

啓の家の電話が鳴った。

「・・・」

右手を伸ばし、「もしもし」

『拓也。俺たちは浅井 啓刑事から官房長官を『守って』いたんだよ。』

「・・・どういう意味。」

『あの官房長官は官房機密費を使って自分の不正所得・・・つま

り、株とか土地とか資産の不正申告を行っていたことをマスコミを黙らせていたんだよ。』

「そんな・・・！！」

「そんな奴いなくてもいいだろ？官房機密費に領収書はいらない。官邸には随時2000万円現金で置かれ、使った分だけ翌日の朝には『補充』される。』

「・・・」

「浅井 啓刑事もそれを知っててSPやってた訳。』

そこで、声の主 拓末は一呼吸置き、くすくすと笑う。『さて、何処までつきとめられるかな、その不正を。』

「みんな、お前の仕掛けた『罠』だな。』

貢は叫んだ。「やめろ！啓に手を出すな！」
途端。

貢の体は『発熱』し、周囲は火の海と化した。

「あれまー、ずいぶん焼けちゃって。」

のんびりした口調で、啓は自宅マンションの一室を見上げた。

「スプリンクラー、付けといて良かった。」

朝方の火事――近所の人たちと報道陣、パトカーに救急車などが辺りを埋め尽くしていた。

「浅井刑事！」

一人の警察官が、啓に走り寄り、「『彼』の意識が戻りました。」

「そう。」

啓は振り返り、「すぐに行くから。あ、現場検証は特にしないでもいいよ。『原因』は判っているから。」

「は？」

「俺の『不始末』。」

右手をひらひらと振り、人の輪の外にある青い車に乗り込む。
マニュアルのレバーを引き、アクセルを踏む。

「やつちゃったねー。」

啓は首都高を目指して車を走らせながら、右手の親指を噛む。

「奴は俺の今回の『仕事』を全部知っている……貢はそれに巻き込まれたんだ。」

首都高まであと少し。啓は探るような瞳で、

「あの『拓末』の目的は何だ……少なくとも貢から BABY RON にアクセスして、何らかの理由で携帯の電源切っちゃったんだろうね……通じない訳だよ。」

そして、呟く。「あー、保険おりるかなー。あの物件結構良かったのに。」

空は青く、雲ひとつない。

「スプリンクラー付けられる『物件』見付かるまで、病院暮らしでも

すっかー。」

なおもしつこく。「保険おりるかな………おりなかったら SWAP に払ってもらおう。」

何かが、また動き出している事に、啓は気付いていた。

2・狙撃（後書き）

気分転換にどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6879m/>

BABYRON 2

2010年10月10日14時04分発行